

令和2(2020)年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)
 実績報告書(プログラム実施報告書)
 (研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)
 (ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI)」

課題番号：20HT0084

プログラム名：いろいろな国の同じこと・違うこと 2020 - 「いのちのはじまり」から学んでみよう -



所属 研究 機関	名称	聖路加国際大学
	機関の長 職・氏名	学長・堀内成子
実施 代表者	部局	看護学研究科
	職	教授
	氏名	五十嵐ゆかり

開催日	2020年11月3日(火)祝日
実施場所	ZOOMによるオンライン開催
受講対象者	小学5・6年生
参加者数	11名(当日のキャンセルあり)
交付申請書に記載した募集人数	15名

プログラムの目的

我が国の在住外国人人口の増加から、今後の多文化共生社会を見据え、小学生の時期に多様な背景を持つ女性とコミュニケーションをとることによって、多文化共生への感受性を育むとともに異文化理解につなげること、また、出産というテーマを通じて、出産に関する解剖生理学的な知識を得るとともに妊娠や新たな命が生まれることから普遍性を知り、出産にまつわる文化儀礼などから多様性を知ること目的とし、実施した。

プログラムの実施の概要

<工夫した点>

- ZOOMの使用に不安のある場合は、当日のアクセスなどがスムーズになるよう事前に一緒に練習を行った。
- 当日使用するワークブックや妊婦体験用エプロン等のグッズを事前に郵送し、体験型になるように工夫した。また、アクティビティを多くしたり、映像も使用したりし、集中力が途切れないようにした。
- 自己紹介の時間を設け、発言しやすい雰囲気をつくってからプログラムを開始した。
- 目の疲労を考慮し、こまめに休憩をとった。
- 6名の在住外国人女性の講演を聞くだけではなく、おしゃべりタイムを利用した交流の時間をもち、直接コミュニケーションをとって、疑問や異なる文化の習慣などを質問する機会を設けた。
- 未来博士号の授与式はオンラインで行い、賞状はプログラム終了後に郵送した。

<当日のスケジュール>

9:00-9:10	開校式(挨拶、オリエンテーション、科研費の説明)
9:10-9:20	自己紹介
9:20-9:40	講義Ⅰ「科研の成果 1: 日本における在住外国人女性の出産体験」(休憩 5分)
9:45-10:00	講義Ⅱ「科研の成果 2: 多文化共生の感受性を高めるプログラム」(休憩 10分)
10:10-10:20	体感演習Ⅰ: 子宮の中ってどうなっているの?
10:20-10:40	体感演習Ⅱ: 妊婦さんを体験してみよう! (休憩 10分: 手洗い&おやつタイム)
10:50-11:20	演習Ⅰ「外国人ママのお話をきいてみよう-その1-」3名(休憩 10分)
11:30-12:00	演習Ⅱ「外国人ママのお話をきいてみよう-その2-」3名(休憩 10分)
12:10-12:20	おしゃべりタイム 外国人ママへの質問してみよう!
12:20-12:30	講義Ⅲ 同じこと・違うことのまとめ
12:30-12:35	閉校式(未来博士号授与について、アンケート)、解散

<実施の様子>



クイズの様子



ワークブック



外国人ママのお話の様子

<事務局との連絡体制>

本学の研究助成課が経費の管理や日本学術振興会との連絡調整を行った。

<広報活動>

今回はCOVID-19の影響から当初予定していた8月開催の時期を変更した。対象が小学高学年であるために受験を控えている場合も考慮し、11月の開催とした。しかし、開催日が全国小学生統一テストの日と重なってしまったためか、申し込み後もキャンセルがあった。今後はイベントなどとの重なりに注意していきたい。

<安全の配慮>

郵送した菓子についてアレルギーの確認し、さらにプログラム中に食する前に再度アレルギーについて説明した。また、事前に COVID-19 の感染予防対策に関する資料を送付し、菓子を食べる前の手洗い、アルコール消毒を促した。

<今後の発展性、課題>

アンケート結果から、全参加者が「とてもおもしろかった」(82%)または「おもしろかった」(18%)と回答しており、さらに感想としては「楽しかった」「また参加したい」「いろいろな国の人とちょっと話してみたいと思った」など、満足度が非常に高かった。今回は COVID-19 感染拡大予防のため、オンライン開催としたが、オンラインによるコミュニケーションの経験がある参加者が多く、トラブルもなくスムーズに行うことができ

た。まれに参加者のインターネット回線が不安定なときがありプログラム中の入退室はあったが、進行に影響はなかった。オンライン開催への参加に対する回答は、「とても参加しやすかった」(64%)「参加しやすかった」(27%)「わからない」(9%)と、開催方法への満足度も高かった。開催地は東京であったが、関東圏(東京、千葉、埼玉、神奈川、茨城)のほか、大阪、愛知、三重などの遠方からの参加もあって、普段は会うことのない参加者同士の交流の機会ともなり、オンライン開催のメリットを感じた。しかし、対面とは異なりオンラインでは集中力の継続が困難なこともあることから、3 時間半は小学生にとって長丁場であったかもしれない、という意見もあった。今後のプログラム構成の工夫に生かしていきたい。

保護者もアンケートに「とてもおもしろかった」(64%)または「おもしろかった」(36%)と回答し、「プログラムの内容は非常に貴重である」という感想が多かった。具体的には「普段知りえない価値観や世界を教えていただいたことは、子どもの心に大きく影響され、いつかどこかでこの経験が生かされると思う」「子どもが考えたこともなかったことを考える機会になったと思う」とプログラムへの好評のほか、「外国人の方の声は私たち自身も気に留めて、言葉や思いやりを子どもに伝えていきたいと思う」と、自身の学びにもつながった、というコメントもあった。参加者からは多くの文化に触れることの楽しさだけでなく、「おもりを付けてみて妊娠したときは大変とわかった」「赤ちゃんが生まれるのは同じだけど、生活や文化は違うことを学んだ」「外国人が困っているときは自分のことだと思うようにする」などのコメントもあり、プログラムの目的を達成できたのではないかと思う。また、研究に興味がありましたか?という質問には「非常に興味があった」(73%)「興味があった」(18%)「わからない」(9%)と回答しており、今回のテーマだけでなく研究や学問への興味関心を高めることもできた。

本テーマは、これからの多文化共生を支援するために、小学生の時期から本プログラムのような体験を通じて体感し、考える機会を持つことは非常に重要であるため、今後も継続してプログラムの提供を行っていきたい。また「オンライン開催は参加しやすかったため今後も継続してほしい」という要望が参加者・保護者の両者からあった。今後は対面だけではなく、オンラインとのハイブリット型の開催も考慮し、より多くの人に参加できるような企画を検討していきたい。